



Title	子どもの活動システム分析を通じた資源概念とデザインに関する環境行動論的研究
Author(s)	尹, 俊到
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46947
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 尹 俊 到

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 20376 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 18 年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

工学研究科建築工学専攻

学 位 論 文 名 子どもの活動システム分析を通じた資源概念とデザインに関する環境行動論的研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

助教授 木多 道宏

(副査)

教 授 奥 俊 信 教 授 横 田 隆 司 教 授 鳴 海 邦 碩
助教授 鈴木 毅

論 文 内 容 の 要 旨

人間と環境との相互関係について、従来の研究により様々な理論が提唱されてきた。これらの中で、環境における人間の行動は、計画者の意図やデザインの慣習によって形成された環境に適合しないことが指摘されてきたが、未だ、人間行動と環境との乖離を説明できる理論的構造を提示するに至っていないと考えられる。

以上を背景として、本研究では近隣レベルの住環境における子どもの遊びを取り上げ、人間の行動と環境との本質的な関係を理解・分析することで、人間行動を根拠にする計画の方法論について、従来の理論に代替する観点を提案することが目的である。

本論文の第 1 章では、建築環境における人間行動と建築計画意図との相違、また人間行動を扱う方法論の問題を述べ、本研究の背景と目的、研究方法を論じている。

第 2 章では、ベトナム 6 都市における子どもの遊びの詳細な観察と分析に基づき、人間活動と環境との関係を正確に分析するためには、人間の活動を多数の個別的な小行為 (a Set of Individual Action) によって分析することが有効であることを示している。具体的考察の結果、人間活動・環境の間に位置する小さな分析単位である「個別行為 (Individual Action)」の概念と、個別行動との相互関係によって使われる環境の属性、すなわち「資源 (Resource)」という概念的な分析単位を提唱している。また、このような概念を通じて、場所・活動・個別行動・資源の関係を説明するための仮説モデルを提示し、個別行為群の間に形成されている構造「活動システム (Activity System)」の読みとりを試みている。

第 3 章では、ベトナムの風土的性向が強い都市居住地に加え、韓国での計画的集合住宅団地を対象とし、子どもの活動が文化的差異や外部空間の想定された使用目的よりむしろ、環境的属性である資源によって左右されることを実証し、前章で提示したモデルにおける資源の概念を具体化・類型している。これらの考察に基づき、①利用された資源によって活動を再分類できること、②資源は根本的に、道路、遊び場のような計画的空間区画とは無関係に、子どもが意図する活動の内容によって定義されること、③子どもの活動は、社会的、物理的、道具的、状況的資源の有機的な関連構造の中で発生しており、主要な資源の性質が変われば、活動の性質が変化することなどを解明している。

第 4 章では、第 2 章で提示したモデルの具体的検証を行うため、日本の計画的団地ならびに非計画的居住地計 6 地

区で収集した多様な事例を基に、活動と個別行為との関係性について、①時間的連続性（同時構造—時系列的構造）、②重要度（同等—従属）、③依存関係（機能的依存、社会的依存、連結構造）を読み取っている。さらに、微細な個別行為の発現に必要な資源を特定することにより、活動システムの概念により、活動と資源との複雑な関係性を正確に分析できることを実証している。

最後に第5章では、上記の研究成果を整理し、人間活動と環境との関係性を分析する方法論について総括するとともに、子どもにとって豊かな住環境や外部空間を計画するための知見を提示している。

論文審査の結果の要旨

人間と環境との相互関係の解明、ならびに、これを踏まえた人間的な建築・都市の計画について、従来より様々な研究が展開されてきた。しかし、最も根本的な環境における行動に関して十分に有効な理論や知見が示されているとは言えない。本論文は、既往研究の知見を精査した上で、人間行動と環境との関係の構造的モデルを提案し、さらに、ベトナム・韓国・日本の既成市街地または計画的集合住宅団地における子どもの遊びを綿密に調査し、モデルの有効性とデザインへの応用性を提示したものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1) 環境と人間との相互関係から現われる「活動 (Activity)」の構造を生態学的観点から分析し、活動が複数の微細な「個別行為 (Individual Action)」群から構成されることを提案・実証している。また、特定の活動において個別行為群の間に形成される関係性を「活動システム (Activity System)」と定義し、①時間的連続性（同時構造—時系列的構造）、②重要度（同等—従属）、③依存関係（機能的依存、社会的依存、連結構造）の三つの次元があることを明らかにしている。
- (2) 環境における人間行動の誘発性に関する既往研究を整理・体系化し、活動や個別行為が発現する過程において選択される環境の属性として、「資源 (Resources)」の概念を提案している。また、調査観察事例の読みとりにより、物理的資源、社会的資源、道具的資源、状況的資源、規則資源、他の行為資源の6種類を特定している。さらに、特定の場所で多様な活動が発生する現象、多くの場所で同一の活動が発生する現象を分析し、文化的差異や近代的計画の介入の影響について検証している。
- (3) 本論文で構築した活動、個別行為、活動システム、資源の概念に基づき、従来の環境行動研究が重要課題としてきた環境・人間行動・場所の関係性の理論を代替する、場所・活動・個別行為・資源のモデルを提案している。また、活動システムと資源の対応関係を基に、子どもの遊びを①依存関係（社会的な依存—機能的な依存）、②時間的連続性（同時発生—時系列的発生）の組み合わせにより再分類することの有効性を明らかにしている。
- (4) 住環境のデザインにおいて、資源の社会性、時間的変化、変形可能性などの属性を総合的に考慮することにより、子どもに多様な環境の選択の機会を提供すること、居住地の中に多様な活動が行われる場所を増やすことが重要であることを提示している。また、近隣スケールにおける資源の多様性と選択性を確保するために、資源の分布と配置を考慮するとともに、各場所を連結するネットワークのデザインの必要性を示している。

以上のように、本論文は、人間と環境との相互関係を有効に説明するための新しいモデルを提案するとともに、住環境における子どもの体験を豊かにするための資源のデザインのあり方を提示していることから、建築計画・都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。